

# 法華經の流伝——インドから東アジアへ

ニルマラ・シャルマ

法華經は、サンスクリットで書かれたすべての經典の中で最大の影響力を示し続けている經典です。まとめられたのはかなり早く、紀元前一世紀頃です。法華經は多くの熱烈な信仰実践を引き起こし、それがもたらした奇蹟的な功德の数々は、おびただしい物語となつて東アジアで語られています。この經の「方便」(upāya)「ウバーヤ／巧みな手段」思想は、東アジア仏教の教相判釈に論理的基礎を与えました。法華經はまた東インドにおいても中心的經典であったにちがひありません。玄奘〔七世紀の唐僧〕によれば、そこではグプタ朝のク

マールラグプター一世 (Kumaragupta I)〔在位・四一五―四五五年頃〕が「一乗」に帰依していたといふのです。法華經は驚異の書であり、「人間的な、あまりに人間的な」魂が高みへと現状を超えていかんとする熱烈な祈願の書なのです。法華經は「アジアの半分の地域における福音書」と呼ばれています。ケネス・J・サンダース (Kenneth James Saunders / 一八八三―一九三七年) が、世界に最大の影響を与えた三つの書のひとつとして、ヨハネ福音書、バガヴァッド・ギーターとともに法華經を挙げているのです。<sup>(2)</sup>

## 法華經の際立つた特徴

(1) 法華経は「一乗 (Ekayana エカヤナ)」の最高の表現であり、ここではekaは「至高の、唯一の」を意味します。(悟達に至るには)ただひとつの乗り物しかないのです。この経は、三乗 (Triana トリヤナ) すなわち声聞乘 (上座部)、縁覚乘、菩薩乘に勝る教えであると自ら説いています。<sup>(3)</sup> 三乗は、さまざまな機根 (能力や資質) をもつ衆生を悟りへと導くための便宜的な手段すなわち方便にすぎなかったのです。実際には、ただ「一乗」によってのみ、一切衆生は仏の悟りの境地へと進んでいけるのです。釈迦牟尼は、一乗は彼の教えの統一的で完全な最終的開示であると述べています。これこそが唯一にして究極の道である一乗なのです。

(2) 多くの場合、釈迦牟尼は舍利弗 (サーリプッタ) と目連 (モッガラーナ) を脇侍にしています。しかし、ここでは阿難 (アーナンダ) と迦葉 (カッシャバ) に代わっています。

釈尊は、摩訶迦葉 (マハーカッシャバ) が将来、仏になると言います。<sup>(4)</sup> (授記品冒頭)。敦煌石窟群において (釈尊の脇侍を) 迦葉と見なせるかどうか、その基準を検討すべきであると私は思っています。

釈迦牟尼は、法華経の第九章 (授学無学人記品) で、阿難と羅睺羅 (ラーフラ) が将来、如来になると宣言します。(釈尊の子息である) 羅睺羅の未来成仏を述べる際に、釈迦牟尼の父親としての愛情が明らかになりました。以下の部分です。

我は太子<sup>た</sup>為りし時 羅睺は長子と為り<sup>な</sup>

我は今仏道を成ずれば 法を受けて法子と為れり

未来世の中に於いて 無量億の仏を見たてまつるに

皆<sup>そ</sup>其の長子と為って 一心に仏道を求めん

羅睺羅の密行は 唯我のみ能く之を知れり

現に我が長子と為って 以て諸の衆生に示す

無量億千万の 功德は数う可べからず

仏法に安住して 以て無上道を求む<sup>(5)</sup>

この阿難と羅睺羅という弟子は、それぞれ釈迦牟尼のいとこと実子という組み合わせです。これは、阿弥陀仏のような他仏に対する釈迦牟尼の首位性の復活を表しています。法華経は、他の諸仏から離れて釈迦牟尼に回帰したのです。家族のつながりは、釈迦牟尼の養母である摩訶波闍波提（マハーブラジャーバティー）と妻であった耶輸陀羅（ヤシヨータラー）に対する未来成仏への授記（勸持品第十三）でも見られます。

(3) 大乘の菩薩は、高貴なる「摩訶薩」(Mahasatra マハーサットヴァ／偉大な衆生)へと高められてきました。摩訶薩は常に菩薩を形容する語として後ろに置かれ、「菩薩摩訶薩」として使われます。漢訳法華経の第十五章〔従地涌出品〕には四人の菩薩摩訶薩が莫大な数の菩薩群の最上位の指導者として現れ、次のような名前をもっています。

上行 (Vishvacharita ヴィシシュタ・チャーリトラ／勝れた所行の者)

無辺行 (Anancharita アナンタ・チャーリトラ／無辺の所

行の者)

浄行 (Visuddhacharita ヴィシシュッタ・チャーリトラ／清浄

な所行の者)

安立行 (Suprasthacharita スプラタイシユテイタ・チャー

リトラ／確固たる所行の者)

迦葉あるいは羅睺羅  
菩薩摩訶薩  
菩薩摩訶薩

釈迦牟尼と多宝如来

阿難  
菩薩摩訶薩  
菩薩摩訶薩

法華経における「現在仏と過去仏」  
「歴史的釈迦牟尼の二人の弟子」「四人の菩薩摩訶薩」。これらは、八重の要素をもつ次のような配置を構成します。

かつての研究においては、この配置が法華経に特有のものとは認識されていませんでした。敦煌の多くの壁龕（の塑像など）は、特定の経典とは関連づけられず、一般的な概念で説明されてきました。しかしながら、敦煌石窟における八重の配置を新たな眼で見直したならば、それらは法華経と結びつけられることでしょう。この配置は法華経を唯一無二の「一乗経典」として特徴

づけて示しているものであり、単なる大乘諸経典のうち  
のひとつではないことを含意しているのです。

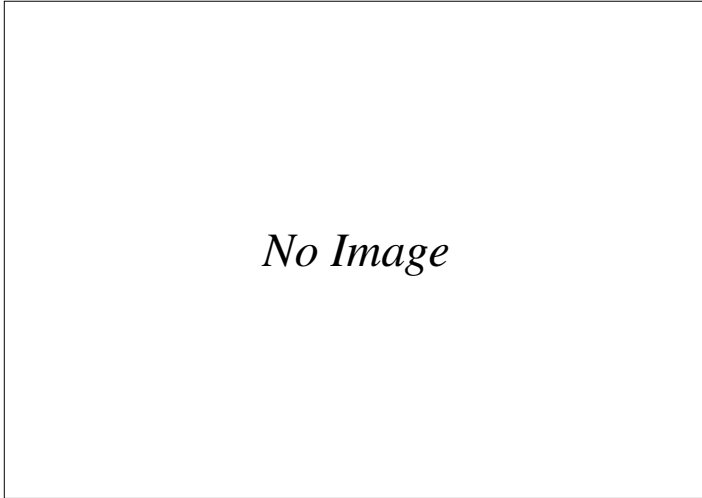


図1 「二仏並座図」。敦煌莫高窟第285窟（西魏／6世紀）南壁。北壁にも、この図と対称的な位置に「二仏並座図」が描かれている。敦煌研究院撮影

(4) 過去の仏とは燃燈仏<sup>(6)</sup> (Dipankara デイバンカラ／灯火を輝かせる者) でしたが、法華経では多宝如来 (Prabhutarana プラプータ・ラトナ／多くの宝玉) という名をもつ新たな過去仏に交代しています。この仏は宝浄世界 (Ratnavisudha ラトナ・ヴィシユッタ／宝玉で飾られた浄土) という浄土に住んでいます。多宝如来の宝塔は、まばゆい流星が出現したかのように輝き、きらめきながら出現し、空に浮かびます。釈迦牟尼は塔の扉を〔右の〕指で開き、多宝如来の姿が顕れます。塔の中に二仏は並んで坐ります。この姿は、法華経の象徴的形象として絵画や石造仏、金銅仏などに表現されました。敦煌の初期石窟の非常に多くのものが、この二仏並坐像を含んでいます〔図1参照〕。

(5) 法華経において、釈迦牟尼は永遠の存在です。彼はこの歴史的人生の前に、はかりしれない無量劫の昔においてすでに成仏していたのです。

(6) 法華經第二十四章〔梵文。現行漢訳では第二十五章。

観世音菩薩普門品〕では、「あらゆる方向に顔を向ける (Santamukha)」「観世音菩薩の奇蹟的な救済力の数々を語っています。彼は「六つの危機」<sup>(7)</sup>から人を救います。

①大火に巻き込まれた人②大水に流された人③金銀をはじめ多くの宝石を積んで大洋を渡る途中、不意の暴風によって羅刹の島に漂着した商人④死刑に処されようとしている人⑤多くの宝玉を運ぶ途中、盗賊に襲われた隊商の商主⑥情欲にとらわれて振る舞う人は、欲を離れられる。息子や美しい娘がほしい女性は、彼らを産むことができる。

こうした願いはどれも、だれもが共通にもつ関心でした。そのため、観世音が経巻や敦煌の壁画の主役になったのは自然なことでした。上記の緒難は、敦煌の絵画に頻繁に描かれています。その一例は大英博物館所蔵の絵です。そこに描かれた最初の危難は、人に押されて燃え盛る火炎の中へ落とされてしまった男性の姿です。そこには經典の偈が書かれています。

仮使興害意 推落大火坑

念彼観音力 火坑變成池

〔仮使害の意を興して 大なる火坑に推し落とさんも彼の観音の力を念せば 火坑は變じて池と成らん〕<sup>(8)</sup>

この章のタイトルはバートン・ワトソン (Burton Watson) によって「世界の音を受け取る菩薩のあらゆる方向へ開かれた門 (The Universal Gateway of the Bodhisatva Perceiver of the World's Sounds)」「観世音菩薩普門品」と訳されています。<sup>(9)</sup> もともとのサンスクリットの章名にある *Santamukha Avalokitesvara* という語には「彼は、すべての方向 (*samanta*) に、顔を向ける (*mukha*)」という意味があります [Avalokitesvara の鳩摩羅什訳が観世音]。それは、信者がどこにいても助けてあげるためであり、信者はただ彼の名前を呼ぶだけで、危難に打ち勝てるのです。敦煌のある壁画は、ソグド商人たちが商品を引き渡すよう盗賊に強いられる場面を描いています。商人が観世音の名前を唱えると、彼らを殺そうとしている悪人たちの剣がこなごなに砕けます。<sup>(10)</sup>

六つの危難からの救済者として、観世音あるいは観音は、中央アジアと中国において法華経の流行をもたらしました。シルクロードを通じて馬やその他の物資を中国に持ち込む商人たちは、観音菩薩の名を呼びました。そうすることで彼らは、盗賊の襲撃や、急ごしらえの吊り橋から落ちて川で溺れることへの不安がなくなりしました。また、水なき砂漠と灼けつく大地と果てしなき荒野を、くる日もくる日も一人の人間も見ることなく進むうちに鬼女の幻姿に悩まされるという恐れから救われたのです。

中国における法華経の傑出した人気は、このように国際商人たちに安心感を与えたからであり、また知識層には哲学的洞察を与えたからでした。そして国家を守護する経典としての人気でもありました。

(7) 国家と君主と民衆を、さまざまな禍難・戦争・天災・疫病から安全に護ることを法華経は保証しました。<sup>(11)</sup> 日蓮大聖人(Daishonin)の著作『立正安国論』のテーマは国の守護にあります。それは西暦一二六〇年に前執

権・北条時頼に提出されました。同書は、日本に降りかかる諸の災難の原因は法華経への誹謗であり、浄土教信仰と阿弥陀仏崇拜によるとしています。

(8) 法華経は、その寓喩の数々で有名です。それらは、中国の庶民を教化するために、さまざまに語り直されました。これらの譬喩は大衆にもわかりやすく、正しい人生の価値を労なく学べる「目に浮かぶ仏の教え(visual dhama)」となったのです。以下の七つの譬喩が説かれています。①三車火宅の譬え②長者窮子の譬え③三草二木の譬え④化城宝処の譬え⑤衣裏珠の譬え(貧人繫珠の譬え)⑥髻中明珠の譬え⑦良医病子の譬え。

(9) 法華経(妙法蓮華経)の経題にある「蓮華」は、古ウパニシヤッドの思想「太陽の中の黄金の人が心臓の蓮華の中にもいる」や「天空の蓮華」を想起させます。後者は、太陽もしくはブラフマン(梵天)のことであり、『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシヤッド』に説かれています。<sup>(12)</sup> 『パーリ経典の』『サンユッタ・ニカーヤ(相

応部』において、蓮華はこの世の汚れに染められない純粋さを表象しています。「蓮華」と「妙法 (saddharma)」はしっかりと結びついています。

法華経は釈尊によって、靈鷲山 (Vulture Peak / 鷲の山) で説かれましたが、ここは (後にナーランダ僧院ができた) ナーランダの近くです。法華経において、釈尊は三昧から立ち上がると、すぐに舍利弗に向かい、こう言います。「諸仏の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり」<sup>(13)</sup>。舍利弗は、諸仏の真の教えをぜひ説き明かしていただきたいと釈尊に懇請します。法華経は、智慧の象徴としての蓮華と密接に結びつき、また智慧第一の舍利弗と、さらに靈鷲山 (Mount Grdhrakuta / グリドラクータ山 / 耆闍崛山) と深く結びついています。これらすべては暗黙のうちに、智慧の光を得るための場所であり、舍利弗の村であるナーランダの地を指し示しているのです。<sup>(14)</sup>

法華経は、ネパールで、基本的な九経典 (*nava-dhamma* / ナヴァ・ダルマ / 九法) のひとつになりました。また、法華経は王室儀礼にも関連していました。『ダンマパダ』

の解説にあるパーリ語の *abhiseka-mungala-pokkharani* の句は、王室の即位灌頂式で使用された蓮池のことを指しています。<sup>(15)</sup>

池の泥の中から咲き出る蓮の華は、人生の多くの苦しみを超え出る純潔さの象徴となりました。

(10) 法華経は、阿弥陀仏に対抗して、釈迦牟尼を「一乗の至高の仏」として復活させるものでした。阿弥陀仏は、インドの北西で興起した仏であり、ペルシャの「光のコスモロジー」の盛行を反映しています。「ヤスナ (Yasna)<sup>(16)</sup>」第三十一章七節では、祝福された領域を元始に光で満たしたのはアフラ・マズダーであったといいます。また第一章十一節では、太陽の光はアフラ・マズダーの栄光をたたえるもののひとつであるとしています。Ani-abha (阿弥陀仏) の語の二番目の要素 *abha* は太陽を意味します。Ani-abhaの意味は「超絶的な太陽」となります。現代ベルシャ語で太陽を意味する *afab* は、サンスクリットの *abha-tāpa* すなわち陽光のことです。インド北西の北道部 (Uttarpathakas)<sup>(17)</sup> は、パーリ語の注

釈書では、軽侮的に扱われています。

一乗は、このような浄土教派に対抗して興起したのです。この派に対する日蓮大聖人の反対は、法華経の淵源にまでさかのぼるものなのです。

### ガンダーラを越えて広がる法華経

玄奘は、シャクラーディティヤ王（クマラーグプター一世）が一乗の信者であったとされていますが、一乗の至上の正典は法華経です。シャクラーディティヤ王は、ガンダーラ地方の向こうのウッタラパタ（Uttarapata）鬱多羅波提（「北方地域を指す」）の僧侶フー・ラージャヴァンシヤ（Hu Rajavansa）の要請で、ナーランダ僧院の建設を始めたのです。<sup>(18)</sup> フーという家族名はイラン系のもので、一乗の時代において、すでに、ナーランダとバクタリア地方の間で毛織物の貿易が活発に行われていました。釈尊は「ドゥサ（Dussa）のパーヴァーリカ（Pavaria 波婆利）長者」のもとに「長者が寄進したナーランダのマンゴー園に」滞在するのを常とされていました。<sup>(19)</sup> 長者は、ドゥサという町からもたらされる羊毛の上着を販売し

ていました。ここは今なおドウシー（Doshi）と呼ばれ、バルフ（Balkh）（アフガニスタンの町。古代バクトリア王国の首都バクトラの跡地ともいう）とバミヤーン（Bamyan）〔多くの仏教遺跡がある〕の中間にある重要な商品集散地です。義浄は、自身の『大唐西域求法高僧伝』（インドに求法した唐僧ら六十余人の伝記）の中で、ウッタラパタにはトカラ人の僧院があり、必要なものはすべてたつぷりとあり、快適に暮らしていたと書いています。<sup>(20)</sup> トカラ人は、ヨーロッパ系の人々であり、ヨーロッパ系の言語を話しました。もちろん、彼らの僧院はそれなりの生活ができる場であればなりませんでした。中国・新疆地域で見つかったトカラ人のミイラは、放射性炭素による年代測定で紀元前二千年にまでさかのぼるとされています

法華経は、西暦紀元前後には北西インドに到達し、中央アジアのホータン王国を経て、紀元一世紀頃には、玉<sup>ぎよく</sup>とその美とともに中国に入ったにちがいありません。<sup>(21)</sup>



## ホータンから中国へ

玉はホータンから中国に來ました。西王母が崑崙山から採れた玉を〔周の〕穆王（在位・紀元前九五六―九一八年。他説も）に贈ったといひます。紀元前十世紀といふ早い時期です。崑崙山脈は大量の玉を産出し、これがホータンの主要な輸出品でした。ホータンはサンスクリットで Ratna-janapada すなわち「玉の国」と呼ばれており、「*ratna*」は「玉」の意味です（*janapada*は王国・領土）。ホータンでの法華經の人氣は多宝如來（Prabhūta-rāma）によつてゐます。その名前は「豊富な *ratna*（玉）」を意味します。この如來は法華經にだけ登場し、他の經典には現れません。チベット語でもホータンを「リー・ユル（*Li-yul*）」すなわち「玉の国」と呼びます。ホータンは、サンスクリットの法華經の最も古く完全な写本を保持してゐたという独特の榮譽を担つてゐます。そこにはホータン語による四つの奥書があります。梵文法華經の断簡もいくつもホータンで発見されており、ホータン語による法華經の要約も見つかつてゐます。

## No Image

図2 ホータンからタクラマカン砂漠に約60km入ると、ラワク（熱瓦克）仏寺遺跡がある（中国・新疆ウイグル自治区）。1901年、スタインの発掘で十字形基壇の仏塔と方庭の壁を飾る壁画や塑像が多数出土した。仏塔の現存する3層のうち第1層は砂に埋もれている。山田勝久氏（大阪教育大学名誉教授）撮影

法華経はホータンの町の防衛に目ざましい役割を果たしました。(チベット語の)『ホータン国史(于闐国史)』には、法華経が読誦されれば紛争が鎮められ、外敵と疫病が避けられると書かれています。<sup>(22)</sup>『ヴィマラプラーバー請問』(Vimalaprabhā-paṇḍita) 無垢光所問(経)(チベット大蔵経カンギュール所収)では、ヴィマラプラーバー(無垢光)(主人公の女性)は「法華経を聴聞して、一切衆生の幸福と息災を実現したい」「法華経の陀羅尼を觀想し、法華経を安置した諸寺院に寄進したい」と念願します。<sup>(23)</sup>「しかし」法華経を毎日読誦するという勤めを彼女が果たさなかったため、「ホータンは」スンプパ人(Sumpas)の軍との戦いに敗れてしまいました。<sup>(24)</sup>『ホータン国教法史(于闐教法史)』では、法華経が読まれるならば、敵、争い、病氣、凶年その他、すべての悪を軽減できるといえます。<sup>(25)</sup>法華経は、ホータンから玉とともに中国の宮廷に入っていったにちがいません。

## 中国語への翻訳

法華経は、西暦二五五年という早い時期に中国語に

翻訳されました。訳者について確かなことはわかっていません。この後、中央アジアの二人の訳経僧による翻訳が続きました。月氏の竺法護(ダルマラクシャ)による二八六年の翻訳(『正法華経』十卷)、そして鳩摩羅什(クマラージーヴァ)による四〇六年の訳出(『妙法蓮華経』。現行八卷)です。二世紀後、ガンダーラの闍那崛多(ジュニャーナグプタ)と南インドの達摩笈多(ダルマグプタ)が六〇一年に共訳しました(『添品妙法蓮華経』七卷)。それらの中で、鳩摩羅什の創造的翻訳は中国語で書かれた作品として最高水準のものであり、そのため千六百年の間、最も広く読まれてきました。

鳩摩羅什は、龜茲(クチャ)国の王女(耆婆)と、鳩摩羅炎(クマラーヤーナ)の子ともでした。父・鳩摩羅炎は(インド北方の)罽賓国あるいはバクトリア地方の人でしたが、王宮での務めをすべて捨てて龜茲国に来ました。母の懐妊中の数々の不思議な出来事(母の記憶力と理解力などが驚異的に増進した)が、生まれてくる子どもの偉大さを示していました。彼女は深く尊崇されていた雀梨(雀離)大寺に参籠しました。<sup>(26)</sup>ここは、カニ

## No Image

図3 標高6000m級のパミール高原の白雪を、東側のタシュケルガン（中国・カシュガル地方）から望む。この嶺を越えれば、かつてガンダーラ、バクトリア、罽賓などの国々が栄えた地域が広がっている。山田勝久氏撮影

シカ王が現在のペシャワールに建てた迦陵頻伽（カラヴィンカ）精舎<sup>(27)</sup>に做<sup>ま</sup>つて建てられた寺院です。彼女はそこで聖なる言葉サンスクリットの習得に没頭しました。阿羅漢の達磨瞿沙（ダルマゴーサ）が、生まれてくる子どもは舍利弗その人のようであろうと予言しました<sup>(28)</sup>。鳩摩羅什がまだ七歳のとき、母は家庭生活を捨てて、出家しました<sup>(29)</sup>。鳩摩羅什は驚くべき記憶力をもち、一日に千偈を暗誦しました。九歳になると、母とともに罽賓国を訪れ<sup>(30)</sup>、小乗（Hinayana）の仏典を学び始めました。三年後、亀茲国に戻りますが、途中で一年間、疏勒（沙勒／カシュガル）王国に滞在しました。ここは（釈尊が用いた）仏鉢がある場所として崇敬されていました。この地で鳩摩羅什は、ヴェーダならびにヴェーダの六種の補助学（音声学・祭事学・文法学・語源学・韻律学・天文学）を学びました。かつて疏勒国の王子であった僧・須利耶蘇摩（スーリヤソーマ）は彼に大乘を教え、鳩摩羅什はそれが「黄金の素晴らしさをもつもの」であると理解したのです<sup>(31)</sup>。これ以降、彼は大乘の修学に専心します。姚興が（後秦の）皇帝になったとき、鳩摩羅什

を長安に招き、温かくもてなして「国師」としました。四〇二年のことです。<sup>(32)</sup> 皇帝は、全土から多くの優れた僧を呼び寄せて、經典の漢訳を開始させました。

鳩摩羅什は皇帝・姚興が建ててくれた公的な訳経場で法華経を翻訳しました。皇帝は自ら法華経の旧い翻訳を綿密に調べ、一方、鳩摩羅什は新たな訳のためにサンスクリットのテキストを解説しました。彼は、それまでの翻訳にあいまいさや誤りが多いことに気がつきました。それらは文学的に見ても洗練されていませんでした。鳩摩羅什は多くの仏典を翻訳しましたが、最も有名なのは、法華経の深遠なる翻訳です。修行者が、その「甚深微妙の偈」を唱えれば「法の清渠（しょうきょ）に澡浴（そうよく）」できるのです。<sup>(33)</sup> 輝かしい彼の文章のおかげで、彼がかつて瞑想修行した亀茲の石窟群も、その奥処までが生き生きと光を放ち始めたといえます。彼の言葉は人生と心を照らす光となったのです。それは千六百年の間、中国人の琴線に触れてきたのです。すなわち、「衆罪如霜露 惠日能消除（衆罪は霜露の如く 慧日は能く消除（しゆじゆ））」の経文のとおりになりますように——と。

彼の翻訳の精妙さと永き輝きにふさわしく、中国の表意文字には「語靈（word-soul）」が宿っています。鳩摩羅什は、インドのサンスクリット、ヨーロッパ語族のネクサス（対結）〔主語述語の結合関係〕をもつトカラ語（亀茲の言語・クチャ語はトカラ語派に属した）、そして中国語という諸言語をその一身の中で連関させた稀有の人物でした。その豊かな言語的感受性によって、彼は創造的な靈性をもつ言語を中国に贈ったのです。鳩摩羅什は彼の助手である僧叡に対して、サンスクリットと中国語の違いについて、こう語っています。「韻を踏んだサンスクリットの句は、音楽のようだ。中国語に置き換えると、この美しさは失われる」と。<sup>(35)</sup> 鳩摩羅什は翻訳の技術を進歩させました。彼は真意を完全に伝えることに努め、逐語的な訳はしませんでした。

法華経の包容力とパワーは、すべての草木を生長させる慈雨の徳に喩えられました。曇無讖（どんむせん）（タルマク シューマ／三八五―四三三年）〔中インド出身の訳経僧〕は、折しも漢訳されていたこの法華経によって、北涼の王・沮渠蒙遜（そきよもうぜん）（在位・四〇一―四三三年）の病を治癒した

のです。<sup>(36)</sup>

法華経は、叙事詩のごとく、次にどう展開するのだろうかと思わせる緊張感があり、それがどんどん高まっていき、決してなくなることがありません。釈尊は、一乗は生きとし生けるものに開かれる道であり、ゆえにこの経の一偈でも受持する者は功德を積むと言います。この経の場面転換の荘厳さと華麗さは、音響や香りの描写と相まって、心に映るイメージを高揚させていきます。法華経は中国における世界観であり実践であり続けました。そして創造的な靈感を生む源泉だったのです。かつても、そして今も「法華経」こそが、一乗の宝玉なのです。

法華経による奇蹟物語（応驗記）を集めた唐代の作品がふたつあります。法華経の説誦・書写・講解などにおける優れた実践に依じて得た靈驗の説話集です。恵詳（恵祥）による『弘誓法華伝』（大正大藏経第五一卷所収）は、百二十九人の法華経実践者の話を集めています。もうひとつは僧詳（僧祥）による高僧伝『法華伝記』（同巻所収）で、百八十人の法華経修行者の伝記を載せてい

ます。法華経を書写するにあたっては、修行者はまず身を浄め、清浄な衣を着し、正しく結跏趺坐します。そして、「一行に二十文字」などのように定められた様式で経文を写しました。

### 敦煌の法華経

中国において法華経はなぜ、かくも中心的な經典になったのでしょうか。同経の過去仏・多宝如来（Prabhutarana）の名は「豊富な *raha*（玉）」を意味します。この *raha* は、「ホータン」のサンスクリット名「*Ratna-janapada*（玉の国）」の中にはつきりと現れています。法華経自らが「化城喻品で」「宝処（*raha-dvipa* / *niharavandvipa*）玉が〔多く〕ある島（場所）」の語を用いています。

「玉」は、中国において皇権の表象でした。『礼記』には「君子の徳は玉のようである」とあります。<sup>(37)</sup> 周公旦が解説をつけた『易経』によれば、天は玉によって象徴されています。<sup>(38)</sup> 玉が最高の長所をもつからです。儒教の經典である『礼記』には、玉はすべての高徳を

備えているとあります。すなわち、仁、知、義、礼、忠、徳、道などであり、玉の虹のような輝きは天を、その（精気を山川に顕す）神秘な特質は地を表します<sup>(39)</sup>。また、「如意」という名の玉製の武器は不思議な力をもっており、防衛のために使われました。このような玉と多宝如来は相関関係にあり、それによって多宝如来は皇権の力と徳を聖化したのです。

法華経は、敦煌の多くの石窟で形象化されています。第二二窟は北涼時代のもので（四二一―四三九年）、釈迦牟尼が四人の弟子とともに描かれています<sup>(40)</sup>。四人の弟子は、つまり法華経の四人の菩薩摩訶薩を表しています。その構図は先述した八重の配置になっています。この壁画は、鳩摩羅什の訳が出たすぐ後に描かれています。

第二五九窟は北魏時代のもので（四三九―五三四年）、正龕には二仏が表現されています。釈迦牟尼は驚異的に莊嚴された宝塔を大地から出現させ、塔は聴衆の上空に浮かびました。釈迦牟尼がその扉を開けると、多宝如来がおわしました。多宝如来は釈迦牟尼の説法を

祝福し、塔の中にも坐すよう促しました。これは、釈尊が永遠であり、さまざまな姿を示すことを改めて示しています。この奇蹟的な出来事に基づく肖像表現「二仏並坐」は、寺院の壁画や絵画、石彫に繰り返し現れます。「奇蹟は中国で力をもっていたし、〔哲学的議論よりも〕この力によって〔仏教という〕宗教の勝利はもたらされたのである」<sup>(41)</sup>。この「二仏並坐」の表現は、五世紀と六世紀の敦煌芸術に大きな影響を与えました。

第四二〇窟は、隋代（五八一―六一八／九年）のもので、法華経に捧げられています。釈迦牟尼が弟子たちと菩薩に説法されている場面を示し、壁には千仏が描かれています〔図4参照〕。

「化城の譬喩」においては、疲れ果てた旅人たちが大きな城市で休憩しますが、後に、それが神通力によって現じた城だと知らされます。この化城は、方便にすぎない三乗を表象しています。三乗は、一切衆生を救済する法華経の生命中心の教え（二乗）に取って代わられます。第一〇三窟は、盛唐期（七〇五―七八〇年）のもので、高価な宝のありかを求めて道を行く隊商が描

## No Image

図4 「法華経変」。莫高窟第420窟（隋／6-7世紀）窟頂。斗（ます）を伏せた形の伏斗式天井に、法華経の序品・方便品・譬喩品・見宝塔品・普門品の場面を描く。同窟の西・南・北の三壁の各龕には仏・菩薩・比丘の塑像が配され、南壁・北壁には千仏が描かれている。隋代は皇室に崇仏の念強く、統治が37年という短期間に、現存する莫高窟492窟のうち約100窟を開掘している。敦煌研究院撮影

かれています。辛苦のあまり、彼らは旅にうんざりして、戻りたくありません。賢明な方略にたけた指導者は、険しい道の途中に大いなる城市を出現させ、そこで元気を取り戻すように告げるのです。城市の中央に塔が建っており、その周りを数人の修行者が〔右回りに巡り歩く〕<sup>(42)</sup>繞仏礼拝をしています。

第二・七窟は唐の神龍年間（七〇五―七〇七年）のもので、釈迦牟尼の法華経説法図があります。第七章の「化城喩」の場面で、旅の険難に疲労困憊した人々を休ませるために指導者（釈迦牟尼）が城市を生み出し、真の宝を見つける旅を再び始められるようにしています。

第四・五窟の南壁は盛唐期のもので、「観世音菩薩普門品」をもとに、観音菩薩が信者を六つの危難から次々に救っています。

第二・三窟には、虚空会の儀式を描いた魅力ある壁画があります<sup>(43)</sup>〔図5参照〕。虚空会は、仏の境涯の無辺さを象徴しています。この素晴らしい仏界の境涯は私たち一人ひとりの生命に内在しています。潜在しているその仏界を私たちも顕現できるのです。池田大作SG

## No Image

図5 「虚空会の儀式」。莫高窟第23窟（盛唐／8世紀）南壁。北魏以来、莫高窟で虚空会は多く描かれてきたが、このように壁全体のメインテーマとして描かれるのは珍しい。敦煌研究院撮影

I（創価学会インタナショナル）会長が解説するように、これは生命がもつ限りなき変革の可能性を示しています。日蓮大聖人は、あなた方の生命こそがまさに宝塔なのだと教えています。「我が身宝塔にして」「見大宝塔とは我等が一身なり」など<sup>(44)</sup>。無明という足かせから解き放たれて、虚空へと翔けのぼるとき、「法性の空に自在にとびゆく」<sup>(45)</sup>ことができるのです。

第六一窟は、九四七年から九五一年の間に造られました。これは敦煌莫高窟の中でも最も名高い聖域であり、その南壁には、大衆に法華経を説法する釈迦牟尼が描かれています。その大きな画面は、法華経の「二十八章のうち」二十二の章の内容を描き出しています<sup>(46)</sup>。

かなりの数の敦煌石窟で、仏塔の中に二仏が並坐する姿が見られます。それらは、生きとし生けるものを救いきることが法華経の教えの眼目であることを強く訴えています。この経は、単なる「大乘仏典のひとつ」ではありません。それ以前の大乗仏典とは対比的に区別されるべき「一乗の根本テキスト」そのものなのです。



法華経は、一乗こそが唯一の道であり、それ以前に説かれた教えに勝ることを明らかにしています。法華経は、その修行者を待つ栄光の数々を約束します。中国の芸術に対するこの経の深大な影響は、万人を包み込むその普遍的なメッセージにありました。これが（中国の）北方と南方が一体となることに重要な役割を果たしたのです。南北は車の両輪のように、あるいは鳥の両翼のように調和するべきだったのです。

これまでの学術研究は、法華経を大乘仏教のテクニトのひとつと見なし、その結果、「一乗の経」であるという独特の (*suī generis*) 性格を見のがしてきました。壁画の新しい解釈は、敦煌という世界に対する新鮮な洞察力をもたらし、これまでにない新知見が得られることでしょう。法華経は実際的にも精神的にも中国の魂であったのです。

結論を述べれば、法華経の教導の一貫性と神聖さ、悪の攻撃への抗戦、世界を歓喜で満たす慈雨のような教え、それらがこの経を教主釈尊が明かされたすべての経典の頂点たる「王冠に輝く宝玉」(*stīraṇam*) にして

いるのです。戸田先生 (*Sansai*) [創価学会第二代会長] によりますと、法華経の最重要の概念は「生命力」です。私たちが題目を唱えれば、宇宙の生命力が私たちの生命力となって噴出するのです。そのとき、私たちは宇宙のリズムと一体になるのです。

〔一〕内は邦訳に際しての補注  
サンスクリット・パーリ語表記は英語原文に準じた

注

- (1) クマーラグプター一世 (シャクラデーティヤ王) は一乗の教えを奉じてナーランダ大学 (現在の東インド・ビハール州) の建物を建造したという。玄奘の『大唐西域記』巻九に「佛涅槃後未久。此國先王鑠迦羅阿逸多唐言帝日敬重一乘遵崇三寶。式占福地建此伽藍」(正大藏経第五一巻九二三頁中) とある。「仏の涅槃の後、まだ余り時がたたないころに、この国の先王の鑠迦羅阿逸多 (原注 唐に帝日と言う) は一乗 (成仏する唯一の教え。仏教) を篤く信じ三宝を尊重し、りっぱな土地を選んでこの伽藍を建てた」(中国古典文学大系22『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、二二六頁)

- (2) (原注) Kenneth J. Sanders, *The Gospel for Asia: A Study of Three Religious Masterpieces: Gita, Lotus, and Fourth Gospel*, New York: Macmillan, 1928.
- (3) (原注) *Saddharmapundarika*, ed. B. Nanjio & H. Kern, St. Petersburg, 1908-12: 79.
- (4) (原注) 前掲 *Saddharmapundarika*: 145.7. "pasyami ahm bhiksava buddha-caksusa shavirvo by ayan Kasyapa buddha bhesvari".
- (5) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、三五〇頁。以下、法華経の引用は同書から。
- (6) 燃燈仏は定(錠) 光如来ともいい、過去仏の第一に記される仏。釈尊が過去世で修行している際、釈尊に未来成仏の記別を与えたという。法華経において、序品では、同名の二万人の日月燈明仏のうち最後の日月燈明仏の八人の王子の一人であるとされるが、寿命品では釈尊が久遠に成仏した後方便として説いた仏とされる。
- (7) 観世音の救済については、しばしば「七難」とされる。その場合、挙げられた火難・水難・羅刹難(風難)・刀杖難・怨賊難以外に悪鬼難・枷鎖(拘束) 難を加え、⑥を含めない。他の数え方もある。
- (8) 『妙法蓮華経並開結』六三三-三四頁
- (9) (原注) *The Lotus Sutra and Its Opening and Closing Sutras*, trans. Burton Watson, Tokyo, 2009: 339.
- (10) (原注) Roderick Whitfield, *Dunhuang, Caves of the Singing Sands: Buddhist Art from the Silk Road*, London, 1995: 316, pl. 109, 110.
- (11) (原注) 『法寶義林 (Hobogirin)』〔フランス語の和漢仏教語辞典〕第四分冊の「Protection de l'Elat (鎮護国家)」についてのジャック・メイ (Jacques May) による記述(三三二-三三七頁) を参照のこと。
- (12) 現存する二百篇以上のウパニシャッドのうち、最も古く重要な十数篇を古ウパニシャッドと呼ぶ。『プリハッド・アールニヤカ・ウパニシャッド』は、その中でも最古(紀元前八〇〇年-同五〇〇年頃)のもののひとつとされる。また、これと同様の思想は後期・古ウパニシャッドの『マイトリー・ウパニシャッド』(六・二) などにも見られる。
- (13) 『妙法蓮華経並開結』一〇六頁
- (14) ナーランダは、舍利弗の出身地であり、亡くなった場所でもあるとされている。中国の僧・法顕(三三七-四二二年)による旅行記『高僧法顕伝』(仏国記、歴遊天竺記伝) にもそう書かれており、舍利弗をしのんで塔(舍利弗塔) を建てたともある。「那羅聚落。是舍利弗本生村。舍利弗還於此中般泥洹。即此處起塔」(大正大藏経第五一巻八六二頁下)
- (15) *abhiseka-mangala* は「即位灌頂式」(*abhiseka* は「灌頂(即位)」、*mangala* は「吉兆の祝典」)、*pokkharani* は「蓮池」。即位の際、新王の頭の頂に特別に準備された蓮池の水を注ぐ「灌頂」の儀式を行った。これが後に仏

教とくに密教に取り入れられた。

- (16) ゴロアスター教の聖典『アヴェスター』全五部の第一部「祭儀書」。祭儀・礼拝用の頌歌で、七十二章からなる。

- (17) 部派仏教のひとつ。

- (18) 義浄『大唐西域求法高僧傳』巻上の慧輪法師の項。「古王室利鑠羯羅跋底。爲北天竺芻謁羅社繫所造」(大正大藏經第五一卷五頁中)。「いにしえの王・室利鑠羯羅跋底(シリィシヤクラーディティヤ)が北天竺の芻謁(ビクシユ/僧)である芻謁羅社繫「社」(ラージヤパンシヤ)のために造る所である」

- (19) 諸仏典で「波波利菴婆林/波婆利掩次林/波和利園/賣衣者菴羅園」などと紹介されている。

- (20) 「住：北方觀貨羅僧寺。元是觀貨羅人爲本國僧所造。其寺巨富貨産豐饒供養遺餘莫加也。寺名健陀羅山茶」(大正大藏經第五一卷五頁上)。「北方の觀貨羅僧寺に住す。もと是れ觀貨羅人が本國僧のために造る所なり。其の寺は巨富、資産豐饒にして供養遺設すること余に加うるものなし。寺は健陀羅山茶と名づく」

- (21) ホータンで採れる翡翠は「ホータン玉(和田玉)」と呼ばれ、「天下第一美玉」として絶大な人気を誇った。中国と西域との境界であった関門「玉門関」の名は、ホータンの玉がここを通り、中国内部に入ってきたことに由来する。

- (22) (原注) F. W. Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents*

*Concerning Chinese Turkestan*, London, 1935: 191.

- (23) (原注) 前掲 Thomas: 1188-89.

- (24) (原注) 前掲 Thomas: 1235.

- (25) (原注) 前掲 Thomas: 1318.

- (26) 玄奘の『大唐西域記』では昭怛釐伽藍(昭怛厘大寺/アーシユチャリア寺)と呼ばれている。現在、スバシ故城(新疆ウイグル自治区クチャ郊外)として知られる仏教遺跡のことともいう。

- (27) カニシカ王の建立した高さ四十余丈の「閻浮提第一の」大塔、いわゆる「雀離浮図」のことか。

- (28) 舍利弗を懐妊したとき、その母も聡明になったという伝承に基づいて、智慧ある子が生まれるであろうと言した。

- (29) 慧皎の『高僧伝』(梁高僧伝)では、母はそれ以前に出家しているとしている。

- (30) 岩波文庫『高僧伝』(一)によれば、罽賓はインド西北の広域を指している可能性があるという(一四七頁)。また、同書とは別に、この語が指す地域は時代によつて異なり、バクトリア方面も含んでいた可能性があることも指摘されている。

- (31) 前掲『高僧伝』に鳩摩羅什の述懐として「吾昔小乗を学べるは、人の金を識らずして鍮石(銅の鉱石、自然銅)を以つて妙と為すが如し」とある。「吾昔学小乗如人不識金以鍮石爲妙」(大正大藏經第五〇巻三三〇頁下)

- (32) 前掲『高僧伝』によれば、鳩摩羅什は弘始三年（四〇一年）十二月二十日に長安に到着した。
- (33) 法華經の開經「無量義經」德行品第一。『妙法蓮華經並開結』一八頁。仏の振る舞いについて述べた部分。
- (34) 法華經の結經「觀普賢菩薩行法經」。『妙法蓮華經並開結』七二四頁
- (35) 前掲『高僧伝』。「天竺國俗甚重文製。其宮商體韻以入絃爲善……但改梵爲秦失其藻蔚」（大正大藏經第五〇卷三三二頁中）
- (36) 智顛說・灌頂記『觀音玄義』卷上（大正大藏經第三四卷八九一頁下）
- (37) 『礼記』玉藻篇に「君子於玉比德焉（君子、玉に徳を比せり）」、聘義篇に「君子比徳於玉焉（君子、徳を玉に比せり）」とある。
- (38) 『易経』説卦伝に、乾坤（天地）の乾について「乾爲天。爲圓。爲君。爲父。爲玉（乾を天となし、円となし、君となし、父となし、玉となし）……」とある。
- (39) 『礼記』聘義篇に、弟子・子貢に対する孔子の言葉として、仁、知、義、礼、樂、忠、信、天、地、徳、道の「玉十一徳」が説明してある。
- (40) (原注) 前掲 Whitfield: 274.
- (41) (原注) J. LeRoy Davidson, *The Lotus Sutra in Chinese Art*, 1954, New Haven, USA:15.
- (42) (原注) 前掲 Whitfield: 297, p.312, 314.
- (43) (原注) *The Complete Collection of Dunhuang Grottoes*, ed.

Dunhuang Research Institute, Hongkong, 1999-2002: 7, pl.66.

- (44) 創価学会版『日蓮大聖人御書全集』一三〇四頁、七四〇頁

(45) 前掲・御書全集、一五八四頁

- (46) (原注) 前掲 *The Complete Collection of Dunhuang Grottoes*: 7, pl.102; 前掲 Whitfield: 2.335; *The Art Treasures of Dunhuang*, compiled by Dunhuang Institute for Cultural Relics, Hongkong, 1981: 105-108.

(Nirmala Sharma / インド文化国際アカデミー [International Academy of Indian Culture] 教授 [美術史])